

かもその多くは彼らの薬剤を「秘密」にすらしていることを聞かされたのであります。……とにかくこれは、科学的な医師にふさわしくないことです。……もしこんなことがヨーロッパにすれば、おそらく日本の医師たるものの信望は地に落ちることでしょう。……正しい根拠に基く唯一の結核特効薬たるツベルクリンですら、今までのところなんら確実な結果を示しておりません。……このような薬剤の発見される日は来ないという意味ではありません。……」としている。

また、日本での医学教育や医療界に対する多くの問題を提起している。

同年7月11日の日記では、天皇隣席の大学修了式に出席して退職するドイツ人教授の一人であるわけであるが、「天皇に紹介さえすられず…自分も面白くない…ひどく自分の感情を害した」とある。ベルツの帰国は1905(明治38)年であった。コッホの来日は1908(明治41)年である。

日本の結核史としては、伝染病予防法の公布が1897(明治30)年であり、この法に結核は含まれず、結核予防法の公布は1919(大正8)年である。我が国の公式な死因統計は1900(明治33)年までさかのぼることができる(結核統計総覧)。それ以前の帝国統計年鑑により1886(明治19)年以降の結核死亡率も見る事ができるとして、島尾忠雄の示すものによれば明治24年の結核死亡率(対人口10万)は132.1である。まん延の極みは1918(大正7)年の257.1であり、その後やや低下するも第2次世界大戦中の1943(昭和18)年に235.3まで増加、その後3年間の統計はなく、第二次世界大戦終戦後1947(昭和22)年に187.2と減

少して、2020(令和2)年の結核死亡者は1909人、死亡率1.5となり、ようやく結核の低まん延国となった。

小高健が2011年に刊行した『日本近代医学史』の明治の結核・伝染病研究所の記載は、ベルツの日本医学批判をしっかりと書き込んでいる。また著者が結核の文化史・社会史としてあげている福田真人『結核の文化史』(1995年)と青木純一『結核の社会史』(2004年)の2書もツベルクリンの始まりとその後の結核をめぐる医療をよく記述している。

評者は著者の「情報」の伝達・普及・切り分けの試みを、明治の結核に対する医学界・社会・行政の一コマについての大変な労作として読ませていただいた。時代は下るが、日本では2004年まで、結核予防のための乳児に対するBCG接種の接種前検査として、コッホの現象による結核既感染者の発見の為に、ツベルクリン検査が必須であったことも記憶しておきたい医学史の一項かもしれない。本書について2022年12月3日毎日新聞『今週の本棚』に、中村桂子の短評では「医療界の風土誕生の原点」とし、2022年12月20日日本医師会日医ニュースの書籍紹介には「転換期の実相を描き」とある。日本の明治における「ツベルクリン騒動」の記録として、これだけ多くの資料をまとめた努力に敬服するとともに、近代日本医学史の新しい観かたを教えてくれたことに感謝する。

(渡部 幹夫)

[名古屋大学出版会、〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学内、TEL. 052(751)5027、2022年11月、A5判、504頁、6,300円+税]

小曾戸洋 著

## 『中国伝統医学 名医・名著小百科』

本書は中国医学を支えてきた333名の医家、そして主要医学書47冊について解説された書籍で、著者は医史学第一人者である小曾戸 洋氏である。同氏が1999年に刊行した『日本漢方典籍辞典』

(大修館書店)は、医史研究家の工具書として活用されている。まえがきには、多くの医史研究家から「中国版辞典を発刊して欲しい」との強い要望が小曾戸氏に寄せられ、『中国伝統医学 名医・名

著小百科』発刊につながったと述べている。一方、「中国医業書の辞典編纂を長年試みたものの項目数は一千点は下らず、容易には果たせない」との思いについても振り返っている。もちろん中国語の高い能力と共に中国および日本の医史に精通し、学術的な姿勢がなければ成せることではない。

本書は人物編と書籍編からなり、どちらも時代別に記され、人物編では「太古・春秋戦国」から始まり、「前漢・後漢・三国・六朝」、「隋・唐」、「北宋」、「南宋」、「金・元」、「明」、「清」、そして辛亥革命以降の「近現代」の医家まで333名の略伝が記述されている。そこには職称（専門医家ではないが伝統医学の発展に寄与した官僚、官吏、文人などの職称）、著作や引用文献も記されている。書籍編では、漢時代の「漢書芸文志・方技」、「馬王堆医書」、「黄帝内経素問」、「傷寒論」、「金匱要略」から清時代まで、代表47点の書籍について記述されている。本書には人名索引と書籍索引が独立して備わり、人名検索によって当該人物の解説に示された著作から書名索引に進めば、中国医書辞典としても活用できる。すなわち人名索引から著作を紐づける新しい辞典であり、小曾戸氏による大逆転の発想である。人物編および著作編とも時代背景や周辺知識、日本との関係についても簡潔明瞭に解説され、日本の伝統医学である漢方医学の研究者にも欠かせない工具書となる。

私自身、本書を手にとった際、先ず人物編の太古の項で伏羲、神農、黄帝の3頁ほどの解説に目を通してみた。その後は初めて出会う人物がほと

んどであったが、まるで歴史小説のように一気に近現在の人物まで興味深く通読してしまった。その理由を考えると、本書は個々の人物像（人となり）が思い浮かぶように描出される文体、何より全体を通じて歴史的な文脈と根拠がしっかりしていることが挙げられる。途中に挟まれるコラムも合わせ読者、研究者へのサービス精神が伺える。

医家の一人ひとりが、どのような立場でどのような行動を取って伝統医学として繋いできたのか？ 関わった多くの医家について人物像を想像しながら研究することも、歴史研究の醍醐味であることを改めて感じさせられた著書である。

小曾戸氏が、まえがきにおいて「執筆にあたっては、現代中国の解説を引き写しにすることは避け、できる限り一次資料かそれに近い資料に基づくように努めた。」と述べている。これこそが、自身の研究が高いエビデンスレベルを保ち、医史学における第一人者として支持されている所以であろう。

あとがきでは、ご自身の祖父、父親のことを回顧されながら「本書に登場する人物は全てにおいて歴史の因果を痛感せずにはいられない。むしろ他の先人・友人からも多くのことを学んだ。」と締めくくっておられる。この次はどのような工夫がされた書籍を刊行されるか、益々楽しみである。

（松田 隆秀）

[大修館書店、〒113-8641 東京都文京区湯島2-1-1、TEL. 03 (3868) 2290、2023年1月、四六判、271頁、2,400円＋税]

## 書籍紹介

F. A. ヨンケル・フォン・ランゲック 著

八木聖弥 監修 熊谷知実 翻訳

『瑞穂草——京都療病院初代外国人医師の日本文化論——』

京都府立医科大学の前身・京都療病院の初代外国人医師ヨンケル (Ferdinand Adalbert Junker von